

## 小学生における基礎基本運動の習熟状況と スポーツ特性に関する研究

### A Study on Achievement of Basic Skill and Sport Characteristics for Elementary School Students

林 園 子<sup>1)</sup> 畑 攻<sup>2)</sup>  
池 田 延 行<sup>3)</sup> 前 田 佳 奈<sup>4)</sup>

*Sonoko HAYASHI, Osamu HATA, Nobuyuki IKEDA and Kana MAEDA*

#### Abstract

This study is to clarify the mutual relation between “the familiarization status of the basic skill for sports activity” and “sport characteristics”, and then to analyze the effective sports and content of learning program, and the way to develop it. The results are summarized as follows;

The results and conclusion were summarized as follows;

- (1) The connection between the familiarization status of learning basic skill, and “sport characteristics” such as likes and dislikes on sports, is made clear. This has strongly demonstrated its importance of class development in accordance with keystone of current teaching guidelines: “clarification of the learning contents.”
- (2) In the development of today’s learning program, it is necessary to clarify appropriate learning contents to characteristics of each sport. For example, clear “skill-up content” is important to adopt in the program for “achievement type” of sports, such as 50m sprint or forward upward circling. On the other hand, “interpersonal type” of sports, such as playing a catch or foot-passing of a ball, is based on interchange with fellows while playing, and “sport environment” which is experienced in daily-life excises, is necessary to be taken in learning contents for this type of sports.

It hereafter will be significant to search the way learning contents suitable for today’s kids sports, should be, and new teaching guidelines.

*Keywords: Basic skill, learning contents, sport characteristics*

#### I. 研究の目的

近年、日本における子どもの体力低下は著しく、文部科学省 (2005)<sup>36)</sup> が実施する「体力・運動能力調査」では、小学校就学前である4～6歳児からみられることが明らかとなっており、危機的な状態として深刻な社会問題となっている。

このような子どもの体力低下問題に対して、中央教育審議会答申 (2002)<sup>34)</sup> 「子どもの体力向上のための

総合的な方策について」、文部科学省 (2004)<sup>24)</sup> 「子どもの体力向上実践事業」、スポーツ振興計画 (2006)<sup>35)</sup> 「スポーツの振興に通じた子どもの体力の向上方策」など様々な方策を打ち出している。

小澤 (2008)<sup>1)</sup> は、子どもの「体力低下」の直接的原因は「身体活動量の低下」にあると指摘している。この「体力」及び「身体活動量」の低下の改善のために、第20期日本学術会議<sup>2)</sup> では、各分野における研究者が子どもの体力低下の現状を取り上げ、政府に対し「我が国の子どもを元気にする環境づくりのための国家的戦略の確立に向けて」との提言を行っている。この中で「子どもを元気にするためには、省庁横断的に総合化する内閣府の調整機能を強力に発揮していく必要がある」と述べていることから、子どもの体力低

1) 日本女子体育大学大学院修士  
社会保険中央看護専門学校 (非常勤講師)

2) 日本女子体育大学 (教授)

3) 国士舘大学 (教授)

4) 日本女子体育大学 (助手)

下問題は公的教育機関のみならず様々な機関が真剣に取り組まなければならないほどの重要な課題ともなっている。

今まで進められてきた学習指導要領(2000)<sup>33)</sup>の体育における目標は「各種の運動の楽しさや喜びを味わうこと」であり、子どもの個性を尊重し、仲間を認め合うことを中心とした身体に負担にならない程度の学習内容であった。しかし、子どもの体力低下の現状を踏まえ、これからの学習内容について細江(2008)<sup>17)</sup>は、「確かな学力」を求めて、知識・技能重視の極に変貌することになるであろうと述べている。

ここから、体力向上を目指す学習内容に重点をおくことにより、実際に各学校でどのように授業展開をするべきか、そのための具体的な学習内容を明確にすることが早急に必要であるといえる。

林(2007)<sup>12)</sup>は、体力向上を目指す具体的な学習内容のひとつの方法として、子どもにとってこれから生涯にわたって運動やスポーツを行うための土台となる動作である「50m走」「逆上がり」「25m水泳」「キャッチボール」「足でのパス」の5種目(これらの種目をまとめて「基礎基本運動」と命名している)の確実な理解と習得の重要性を挙げている。

子どもにとって、基礎基本運動の確実な習得は、各種目に必要な動作にまつわる運動・スポーツに対して意欲・関心を高め、何度でも取り組むことで体力向上へとつながるものであるとしている。すなわち、基礎基本運動の習得は、運動・スポーツに対する意欲・関心の向上及び体力向上への原動力になると述べている。

しかし、林(2008)<sup>13)</sup>の先行研究において、子どもの基礎基本運動の習熟状況が良好であるにもかかわらず、種目によって運動・スポーツに対する意欲・関心が低い子どもが存在する結果を示したことから、「今までの考え方」と「習熟状況が意欲・関心を与える影響」にズレが生じていることが明らかとなった。

本研究では、この実態に着目し、「基礎基本運動の習熟状況」と運動・スポーツにおける子どもの意欲・関心が把握できる「スポーツの特性」の具体的な相互関係を明らかにし、学習プログラムにおける効果的な運動・スポーツの内容及び展開のあり方について検討することを目的とした。

## Ⅱ. 研究の方法

### 1. 基本的アプローチ

図1において、林(2007)<sup>12)</sup>の「基礎基本運動の各種目の習熟状況」が子どもの「スポーツ特性」である運動の「好き嫌い」にどのように関わっているのか検討した結果を示している。「50m走」「逆上がり」は、「うまく(速く走ることが)できるから運動が好き」「できない(足が遅い)から運動が嫌い」という「できる-できない」の達成度が運動の「好き嫌い」に直結する種目であり、この2種目を「達成型」種目としている。また、「キャッチボール」「足でのパス」は、「できる-できない」の達成度にとらわれるのではなく、ボールが持つ本来の特性である家族や友達といった「仲間」と一緒に行くなど対人的な要素にふれることが運動の「好き嫌い」に関与する種目であり、この2種目を「対人型(チーム型)」種目としている。25m水泳は、「達成型」「対人型(チーム型)」の二面性の特徴を持っているため断定することはできない。また、最近の問題<sup>7)</sup>として、「ゆとり教育」による「水泳の授業の減少」「泳げない教師の増加」「無理に泳がせない指導」などの問題、「スイミングスクールに通わせるか否か」の家庭の諸事情による水泳の二極化傾向の高まりから除外している。

本研究では、これらの先行研究の内容を踏まえ、「基礎基本運動の習熟状況のできる-できない」と「運動の好き嫌い」の間を結びつける具体的な要因、すなわち、子どもひとりひとりにおける各種目の習熟状況が「できる」場合、「できない」場合のどちらの状況であったとしても「運動好き」になることができるための要因(「運動嫌い」にさせてしまう要因)を探究し、相互関係を明確にするものである。これは、基礎基本運動をより効果的に習得させ、運動・スポーツに対する意欲・関心への高まり、さらには体力向上へ促すための重要なポイントになりうると考える。

### 2. 調査実施及び調査方法

本研究の調査は、東京都杉並区に所在する小学校3校全学年1128名の児童を対象に保護者同伴の上で、「子どもの運動・スポーツ状況」について質問紙法を用いた。調査内容の概要は表1に示すとおりである。

本研究の鍵となる「基礎基本運動の達成度」と運動

の「好き嫌い」の間に存在する要因について、子どもの「運動生活」7項目と「スポーツ環境」8項目を使用した。この2つの要因は、子どもの運動・スポーツの実態を把握するための有効な手がかりとなりうるものである。

有効回答数は、817名（72.4%）であった。質問紙法で収集されたデータから子どもの基本的特性、スポーツ特性、基礎基本運動における子どもの達成度の項目を中心に必要に応じて $\chi^2$ 検定を用いた。

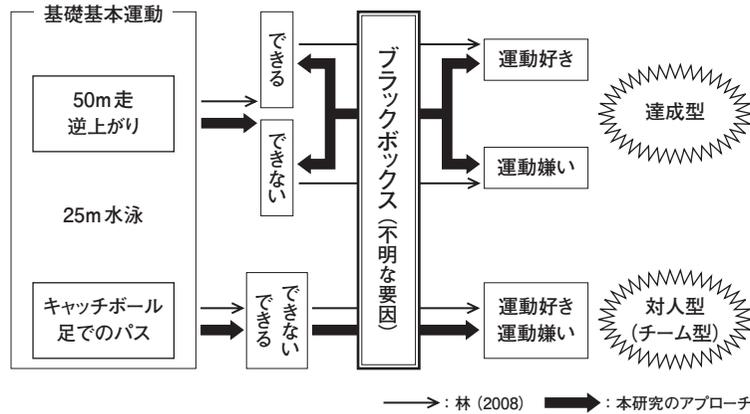


図1 基本的アプローチ

表1 調査方法の概要及び本研究で用いる相互関係要因

調査方法	アンケート
調査内容	基本的特性    スポーツ特性 運動生活    スポーツ環境 ライフスタイル    マルチスポーツ 基礎基本運動達成度
対象者	1～6年生：児童（保護者同伴）
期間	平成19年11月下旬～12月上旬 1128名 有効回答数817名（72.4%）

運動生活	スポーツ環境
① 運動らしいことは授業以外ほとんど行っていない ② 学校の運動系クラブ活動に参加している ③ 学校外のクラブやチームに所属している ④ 学校外でスポーツ教室やレッスンに参加している ⑤ 家族でキャッチボールなど簡単なスポーツをしている ⑥ 自由時間に個人的に運動している ⑦ よくスポーツを観る	① 手軽にスポーツを行える施設がある ② スポーツを楽しむ仲間がいる ③ 身近に子どものスポーツを指導してくれる人がいる ④ スポーツを楽しむ時間が十分にある ⑤ スポーツの面倒をみてくれる人がいる ⑥ スポーツ教室やレッスンがある ⑦ 学校は運動・スポーツによく取り組んでいる ⑧ 子どものスポーツイベントがよく行われている

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 子どもの運動・スポーツに対する諸特性

##### 1) 運動・スポーツ特性

表2は、子どもの実際のスポーツ活動状況を把握するために、「運動の好き嫌い」「運動の得意不得意」「体力の自信の有無」の3つの指標を用いた。

「運動の好き嫌い」において、「好き」の男の子47.4% (n=348), 女の子50.9% (n=374)であり, 男女間に大きな差はみられなかったが, 「嫌い」の男の子39.8% (n=33), 女の子56.6% (n=47)であり, 女の子に運動嫌が多くみられる結果を示した。

「運動の得意不得意」において、「得意」の男の子46.0% (n=282), 女の子51.9% (n=318)であり, やや女の子に得意とする者が多くみられた。「不得意」では男女同等の割合の結果を示した。

「体力の自信の有無」において、「ある」男の子47.1% (n=288), 女の子51.1% (n=313), 「ない」男の子44.9% (n=92), 女の子51.7% (n=106)であり, 「ある」「なし」ともにやや女の子の割合が多い結果を示した。

##### 2) 基礎基本運動の達成状況

表3は、基礎基本運動の各種目における達成状況を示している。全体を通して、全種目の「できる」「ふつうにできる」を合わせると、「50m走」75.5% (n=617), 「キャッチボール」78.0% (n=637), 「足でのパス」79.9% (n=653)の3種目が7割強, 「逆上がり」58.8% (n=480)の1種目が約6割の子どもの達成状況が良好である結果を示した。

「運動好き」において、全種目の「できる」「ふつうにできる」を合わせると、「50m走」79.5% (n=584), 「キャッチボール」79.7% (n=585), 「足でのパス」81.4% (n=598)の3種目が約8割, 「逆上がり」63.0% (n=462)の1種目が約6割の子どもの達成状況が良好である結果を示した。

「運動嫌い」において、「50m走が遅い」56.6% (n=47), 「逆上がりができない」71.1% (n=59)の結果から、約6割以上の子どもが達成型の種目を達成するために苦戦していることが伺える。しかし、「キャッチボールのできる（「ふつうにできる」を含む）」62.6% (n=52), 「足でのパスのできる（「ふつうにできる」を含む）」66.3% (n=55)の結果から、対

人型（チーム型）の種目は「運動好き」と同様に約6割以上の子どもの達成状況が良好の結果を示した。

これらの結果から、達成型の種目は、「できる—できない」の子どものもつ達成感が運動の「好き嫌い」を直接左右する大きな要因になっているといえる。一方、対人型（チーム型）の種目は、「できる—できない」の子どものもつ達成感が「運動の好き嫌い」に関与する要因ではないといえる。ここから、「達成型」と「対人型（チーム型）」それぞれの種目の特性に違いがみられた。

#### 2. 相互関係要因とスポーツ特性

図2・表4及び図3・表5は、本研究において「基礎基本運動の達成状況」と「運動の好き嫌い」の間に具体的な相互関係をもたらし要因として取り上げた子どもの「運動生活」及び「スポーツ環境」と、子どものスポーツ特性である「運動の好き嫌い」をクロス集計した結果である。

グラフが示す各線の主な特徴として、「◆」は、「運動好き」であり、「運動生活」「スポーツ環境」の各項目においても肯定的な者, 「■」は、「運動好き」であるものの各項目において否定的な者, 「▲」は、「運動嫌い」であるが各項目において肯定的な者, 「×」は、「運動嫌い」かつ各項目において否定的な者を表している。

図2・表4の「運動生活」において、「◆」は、「1. 運動らしいことは授業以外ほとんど行っていない」81.7% (n=600), 「2. 学校の運動系クラブ活動に参加している」75.3% (n=553), 「3. 学校外のクラブやチームに所属している」68.4% (n=502), 「7. よくスポーツを観る」72.5% (n=532)の項目の人数が最も多い結果を示した。このことから、運動全般に対して肯定的な子どもは、あまり運動習慣がなくとも、運動・スポーツの楽しさを自主的に味わい、日常生活に取り入れることができる者であるといえる。

図3・表5の「スポーツ環境」において、「◆」は、「2. スポーツを楽しむ仲間がいる」70.0% (n=514)の項目, 「■」は、「3. 身近に子どものスポーツを指導してくれる人がいる」63.8% (n=468)「5. スポーツの面倒をみてくれる人がいる」68.8% (n=505)の項目の人数が多い結果を示した。このことから、子ども自身が学校以外で運動・スポーツの習い事やレッスンを行っているかいないかが大きく関係しているのではないかと考える。

表2 子どもの運動・スポーツに対する諸特性

運動の好き嫌い							
	全 体 N=817		好 き N=734		嫌 い N=83		$\chi^2$ 検定
	n	%	n	%	n	%	
男の子	381	46.6	348	47.4	33	39.8	$\chi^2 = 8.746$ DF=2 *
女の子	421	51.5	374	50.9	47	<b>56.6</b>	
不明	15	1.9	12	1.7	3	3.6	

運動の得意不得意							
	全 体 N=817		得 意 N=611		不得意 N=206		$\chi^2$ 検定
	n	%	n	%	n	%	
男の子	379	46.4	282	46.2	97	47.1	$\chi^2 = 6.659$ DF=2 n.s
女の子	419	51.3	318	52.0	101	49.0	
不明	19	2.3	11	1.8	8	3.9	

体力の自信の有無							
	全 体 N=817		有 N=612		無 N=205		$\chi^2$ 検定
	n	%	n	%	n	%	
男の子	380	46.5	288	47.1	92	44.9	$\chi^2 = 3.245$ DF=2 n.s
女の子	419	51.3	313	51.1	106	51.7	
不明	18	2.2	11	1.8	7	3.4	

表3 子どもの基礎基本運動の達成状況

基礎基本運動	運動の好き嫌い 達成度	全 体 N=817		好 き N=734		嫌 い N=83		$\chi^2$ 検定
		n	%	n	%	n	%	
50m 走	速い	256	31.3	252	34.3	4	4.8	$\chi^2 = 73.965$ DF=3 P<0.001
	ふつう	361	44.2	332	45.2	29	34.9	
	遅い	179	21.9	132	18.0	47	56.6	
	わからない	21	2.6	18	2.5	3	3.6	
逆上がり	できる	218	26.7	214	29.2	4	4.8	$\chi^2 = 55.357$ DF=3 P<0.001
	ふつう	262	32.1	248	33.8	14	16.9	
	できない	305	37.3	246	33.5	59	71.1	
	わからない	32	3.9	26	3.5	6	7.2	
25m 水泳	できる	272	33.3	246	33.5	26	31.3	$\chi^2 = 0.912$ DF=3 n.s
	ふつう	267	32.7	240	32.7	27	32.5	
	できない	246	30.1	220	30.0	26	31.3	
	わからない	32	3.9	28	3.8	4	4.9	
キャッチボール	できる	160	19.6	155	21.1	5	6.0	$\chi^2 = 27.258$ DF=3 P<0.001
	ふつう	477	58.4	430	58.6	47	56.6	
	できない	84	10.3	68	9.3	16	19.3	
	わからない	96	11.8	81	11.0	15	18.2	
足でのパス	できる	156	19.1	153	20.8	3	3.6	$\chi^2 = 24.343$ DF=3 P<0.001
	ふつう	497	60.8	445	60.6	52	62.7	
	できない	72	8.8	56	7.7	16	19.3	
	わからない	92	11.3	80	10.9	12	14.4	

  : 7割以上 (有意差有)
   : 6割以上7割未満 (有意差有)
   : 5割以上6割未満 (有意差有)

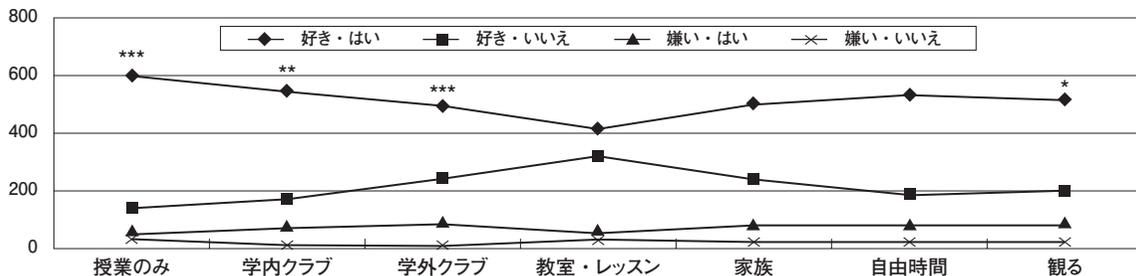


図2 運動生活と運動の好き嫌い

表4 運動生活と運動の好き嫌い

運動の好き嫌い	好き N=734				嫌い N=83				$\chi^2$ 検定		
	はい		いいえ		はい		いいえ		$\chi^2$	DF	P
	n	%	n	%	n	%	n	%			
1 運動らしいことは授業以外ほとんど行ってない	600	81.7	134	18.3	49	59.0	34	41.0	23.539	1	***
2 学校の運動系クラブ活動に参加している	553	75.3	181	24.7	74	89.2	9	10.8	7.975	1	**
3 学校外のクラブやチームに所属している	502	68.4	232	31.6	76	91.6	7	8.4	19.349	1	***
4 学校外でスポーツ教室やレッスンに参加している	410	55.9	324	44.1	50	60.2	33	39.8	0.582	1	n.s
5 家族でキャッチボールなど簡単なスポーツをしている	495	67.4	239	32.6	67	80.7	16	19.3	61.129	1	n.s
6 自由時間に個人的に運動している	542	73.8	192	26.2	71	85.5	12	14.5	5.486	1	n.s
7 よくスポーツを観る	532	72.5	202	27.5	70	84.3	13	15.7	5.407	1	*

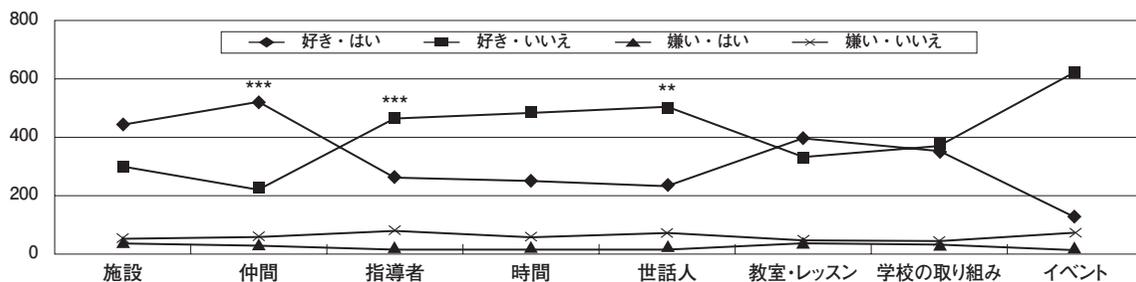


図3 スポーツ環境と運動の好き嫌い

表5 スポーツ環境と運動の好き嫌い

運動の好き嫌い	好き N=734				嫌い N=83				$\chi^2$ 検定		
	はい		いいえ		はい		いいえ		$\chi^2$	DF	P
	n	%	n	%	n	%	n	%			
1 手軽にスポーツを行える施設がある	435	59.3	299	40.7	41	49.4	42	50.6	2.985	1	n.s
2 スポーツを楽しむ仲間がいる	514	70.0	220	30.0	34	41.0	49	59.0	28.520	1	***
3 身近に子どものスポーツを指導してくれる人がいる	266	36.2	468	63.8	14	16.9	69	83.1	12.423	1	***
4 スポーツを楽しむ時間が十分にある	249	33.9	485	66.1	20	24.1	63	75.9	3.261	1	n.s
5 スポーツの面倒をみてくれる人がいる	229	31.2	505	68.8	12	14.5	71	85.5	10.049	1	**
6 スポーツ教室やレッスンがある	397	54.1	337	45.9	41	49.4	42	50.6	0.659	1	n.s
7 学校は運動・スポーツによく取り組んでいる	362	49.3	372	50.7	38	45.8	45	54.2	0.373	1	n.s
8 子どものスポーツイベントがよく行われている	112	15.3	622	84.7	16	19.3	67	80.7	0.911	1	n.s

   : 7割以上  
   : 6割以上7割未満  
 (有意差有) (有意差有)

### 3. 基礎基本運動の達成とスポーツ特性の因果関係

図4・表6は、基礎基本運動の各種目における「できる-できない」が「運動生活」の要因を通して、運動の「好き嫌い」にどのような影響を及ぼしているのかを示した結果である。ここでは、「5. 家族でキャッチボールなど簡単なスポーツをしている」の結果を取り上げ、「達成型：逆上がり」「対人型（チーム型）：

キャッチボール」を比較した。

「達成型」において、「家族でスポーツをしており、運動好き」の者は、逆上がりが「できる」31.8% (n=76)、「ふつうにできる」32.6% (n=78)、「できない」34.7% (n=83) より「できる」「ふつうにできる」を合わせると約6割の子どもができる結果を示した。これは、「家族でスポーツをしていないが、運動好き」の者においても同様の結果であった。

一方、「家族でスポーツをしているが、運動嫌い」

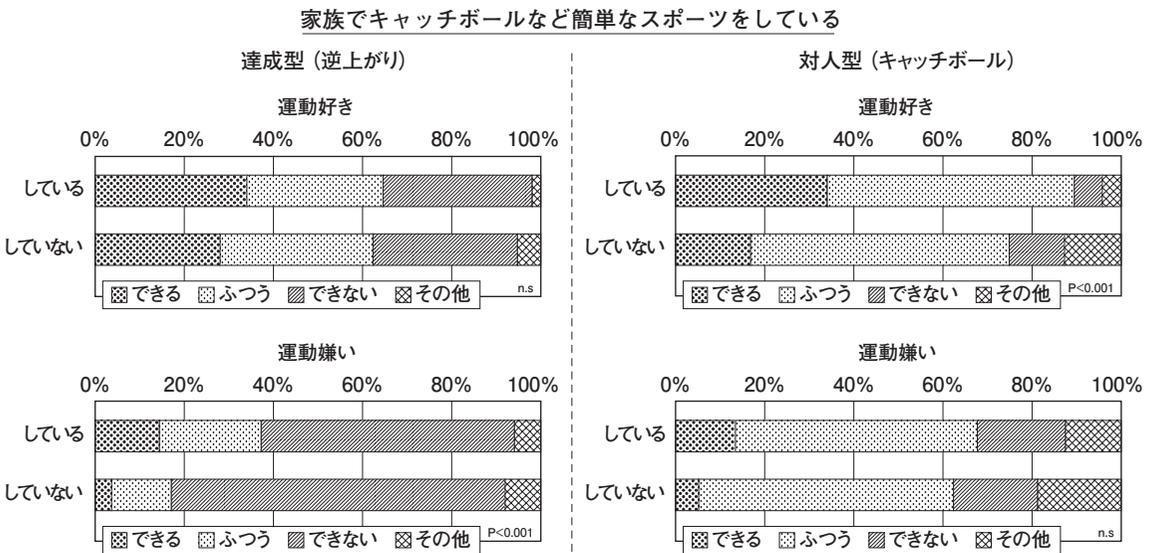


図4 運動生活（要因1）が及ぼす影響（達成型（逆上がり）と対人型（キャッチボール）の比較）

表6 運動生活（要因1）が及ぼす影響（達成型（逆上がり）と対人型（キャッチボール）の比較）

運動好き	している		していない		全体		$\chi^2$ 検定	運動好き	している		していない		全体		$\chi^2$ 検定
	n	%	n	%	n	%			n	%	n	%	n	%	
できる	76	31.8	138	27.9	214	29.2	$\chi^2 = 9.512$ DF=3	できる	75	31.4	80	16.2	155	21.1	$\chi^2 = 33.514$ DF=3
ふつう	78	32.6	170	34.3	248	33.8		ふつう	134	56.1	296	59.8	430	58.6	
できない	83	34.7	163	32.9	246	33.5		n.s.	できない	20	8.4	48	9.7	68	
その他	2	0.8	24	4.8	26	3.5		その他	10	4.2	71	14.3	81	11.0	
運動嫌い	している		していない		全体		$\chi^2$ 検定	運動嫌い	している		していない		全体		$\chi^2$ 検定
	n	%	n	%	n	%			n	%	n	%	n	%	
できる	2	12.5	2	3.0	4	4.8	$\chi^2 = 4.058$ DF=3	できる	2	12.5	3	4.5	5	6.0	$\chi^2 = 6.895$ DF=3
ふつう	4	25.0	10	14.9	14	16.9		ふつう	9	56.3	38	56.7	47	56.6	
できない	9	56.3	50	74.6	59	71.1		***	できない	3	18.8	13	19.4	16	
その他	1	6.3	5	7.5	6	7.2		その他	2	12.5	13	19.4	15	18.1	

: 7割以上 (有意差有)
  : 6割以上7割未満 (有意差有)
  : 5割以上6割未満 (有意差有)
 \*\*\*P<0.001

の者は、逆上がりが「できる」12.5% (n=2), 「ふつうにできる」25.0% (n=4), 「できない」56.3% (n=9) と約6割の子どもができない結果を示した。同様に「家族でスポーツをしていなく、運動嫌い」の者においても、「できる」3.0% (n=2), 「ふつうにできる」14.9% (n=10), 「できない」74.6% (n=50) と約7割の子どもができない結果であった。

これらの結果から、「運動好き」は、「家族とスポーツをしている－していない」に関わらず、逆上がりが「できる」者が多く、「運動嫌い」は「家族でスポーツをしている－していない」に関わらず逆上がり「できない」者が多いことにより、「運動嫌い」の子どもに対して「家族とスポーツをする」要素は、逆上がりが「できる」ようになり、さらには「運動好き」になるように促すための機能として働いていないといえる。

「対人型」において、「家族でスポーツをしており、運動好き」の者は、キャッチボールが「できる」31.4% (n=75), 「ふつうにできる」56.1% (n=134), 「できない」8.4% (n=20) より「できる」「ふつうにできる」を合わせると約9割の子どもができる結果を示した。これは、「家族でスポーツをしていないが、運動好き」の者においても「できる」「ふつうにできる」を合わせると約8割の子どもができる結果であった。

一方、「家族でスポーツをしているが、運動嫌い」の者は、キャッチボールが「できる」12.5% (n=2), 「ふつうにできる」56.3% (n=9), 「できない」18.8% (n=3) より、「できる」「ふつうにできる」を合わせると約7割の子どもができる結果を示した。これは、「家族でスポーツをしていなく、運動嫌い」の者においても「できる」「ふつうにできる」を合わせると約6割の子どもができる結果であった。

すなわち、「運動好き」と「運動嫌い」の結果がほぼ同様の結果を示したことから、「運動嫌い」の子どもに対して「家族でスポーツをする」要素は、キャッチボールが「できる」ようになり、さらには「運動の楽しさを知る」「運動好き」になるための重要な働きをしている要素のひとつであるといえる。

しかし、先に述べたように「家族でスポーツをしていなく、運動嫌い」の者の場合、「運動嫌い」かつ「家族とスポーツをしていない」と全てが否定的であるにもかかわらず「できる」4.5% (n=3), 「ふつうにできる」56.7% (n=38), 「できない」19.4% (n=13) より「家族でスポーツをしているが、運動嫌い」とは

ほぼ同様の結果を示した。約6割以上の子どもができる結果を示していることから、「家族でスポーツをすること」の要素は「運動嫌い」の子どもに影響がないのではないかという矛盾が生じている。この矛盾の原因として、単に「運動嫌い」の子どもには「家族でスポーツをする」要素のみならず、他の様相も加わることにより、キャッチボールに対して「できる」という結果が生じたのではないかと考える。

「運動生活」におけるその他の要素の結果は、「達成型」「対人型（チーム型）」ともほぼ同様の結果を示した。

図5・表7は、基礎基本運動の各種目における「できる－できない」が「スポーツ環境」の要因を通して、運動の「好き嫌い」にどのような影響を及ぼしているのかを示した結果である。ここでは、「4. スポーツを楽しむ時間が十分にある」の結果を取り上げ、「達成型：逆上がり」「対人型（チーム型）：キャッチボール」を比較した。

「達成型」において、「スポーツを楽しむ時間があり、運動好き」の者は、逆上がりが「できる」36.1% (n=90), 「ふつうにできる」30.5% (n=76), 「できない」31.7% (n=79) より「できる」「ふつうにできる」を合わせると約7割の子どもができる結果を示した。これは、「スポーツを楽しむ時間がないが、運動好き」の者においても同様の結果であった。

一方、「スポーツを楽しむ時間があるが、運動嫌い」の者は、逆上がりが「できる」5.0% (n=1), 「ふつうにできる」15.0% (n=3), 「できない」70.0% (n=14) と7割が逆上がりに自信がない結果を示した。同様に「スポーツを楽しむ時間がない運動嫌い」においても「できる」4.8% (n=3), 「ふつうにできる」17.5% (n=11), 「できない」71.4% (n=45) と約7割の子どもができない結果であった。

これらの結果から、「運動好き」は「スポーツを楽しむ時間がある－ない」に関わらず、逆上がりが「できる」者が多く、「運動嫌い」は「スポーツを楽しむ時間がある－ない」に関わらず逆上がりが「できない」者が多いことにより、「運動嫌い」の子どもに対して「家族とスポーツをする」要素は、逆上がりを「できる」ようになり、さらには「運動好き」になるように促すための機能として働いていないといえる。

「対人型（チーム型）」において、「スポーツを楽しむ時間があり、運動好き」の者は、キャッチボールが「できる」29.3% (n=73), 「ふつうにできる」55.4%

スポーツを楽しむ時間が十分にある

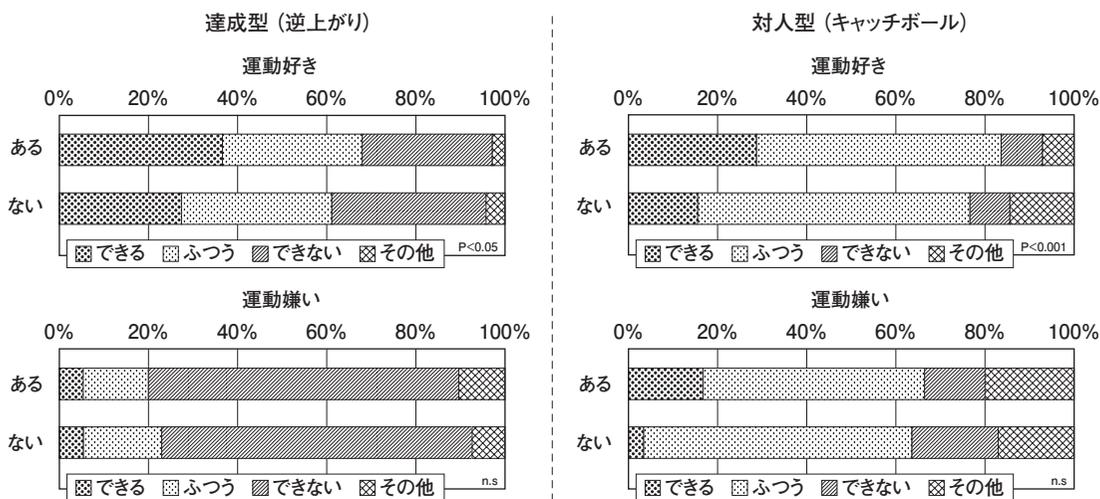


図5 スポーツ環境（要因2）が及ぼす影響〈達成型（逆上がり）と対人型（キャッチボール）の比較〉

表7 スポーツ環境（要因2）が及ぼす影響〈達成型（逆上がり）と対人型（キャッチボール）の比較〉

運動好き	ある		ない		全体		$\chi^2$ 検定	運動好き	ある		ない		全体		$\chi^2$ 検定
	N	n %	N	n %	N	n %			N	n %	N	n %	N	n %	
できる	249	90 36.1	485	124 25.6	734	214 29.2	$\chi^2=12.673$	249	73 29.3	485	82 16.9	734	155 21.1	$\chi^2=19.169$	
ふつう		76 30.5		172 35.5		248 33.8	DF=3		138 55.4		292 60.2		430 58.6	DF=3	
できない		79 31.7		167 34.4		246 33.5	*		21 8.4		47 9.7		68 9.3	***	
その他		4 1.7		22 4.5		26 3.5			17 6.9		64 13.2		81 11.0		
運動嫌い	ある		ない		全体		$\chi^2$ 検定	運動嫌い	ある		ない		全体		$\chi^2$ 検定
	N	n %	N	n %	N	n %			N	n %	N	n %	N	n %	
できる	20	1 5.0	63	3 4.8	83	4 4.8	$\chi^2=1.070$	20	3 15.0	63	2 3.2	83	5 6.0	$\chi^2=7.183$	
ふつう		3 15.0		11 17.5		14 16.9	DF=3		10 50.0		37 58.7		47 56.6	DF=3	
できない		14 70.0		45 71.4		59 71.1	n.s.		3 15.0		13 20.6		16 19.3	n.s.	
その他		2 10.0		4 6.3		6 7.2			4 20.0		11 17.5		15 18.1		

: 7割以上 (有意差有)
  : 6割以上7割未満 (有意差有)
  : 5割以上6割未満 (有意差有)
 \*\*\*P<0.001 \*P<0.05

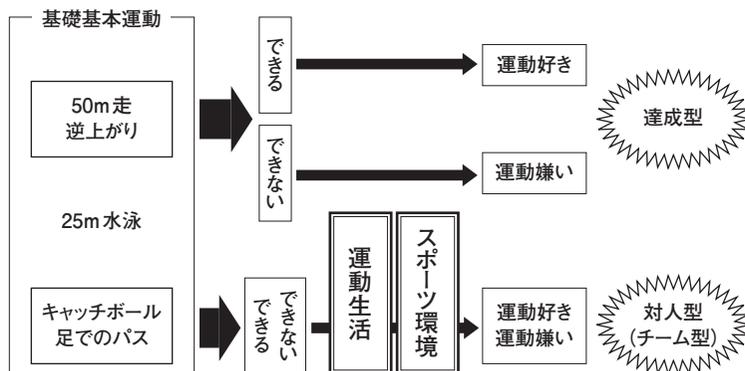


図6 本研究における基礎基本運動の習熟状況とスポーツ特性の関係

(n=138), 「できない」8.4% (n=21) より「できる」「ふつうにできる」を合わせると約8割の子どもができる結果を示した。これは、「スポーツを楽しむ時間がながい、運動好き」の者においても「できる」「ふつうにできる」を合わせると約8割ができる結果であった。

一方、「スポーツを楽しむ時間があるが、運動嫌い」の者は、キャッチボールが「できる」15.0% (n=3), 「ふつうにできる」50.0% (n=10), 「できない」15.0% (n=3) より約7割の子どもができる結果を示した。また、「スポーツを楽しむ時間がなく、運動嫌い」の者においても、「できる」3.2% (n=2), 「ふつうにできる」58.7% (n=37), 「できない」20.6% (n=13) より「スポーツを楽しむ時間があるが、運動嫌い」の者とほぼ同様の結果を示した。

すなわち、「運動好き」と「運動嫌い」の結果がほぼ同様の結果を示したことから、「運動嫌い」の子どもに対して「スポーツをする時間が十分にある」要素は、キャッチボールが「できる」ようになり、「運動の楽しさを知る」「運動好き」になるための重要な働きをしているといえる。また、単に「スポーツをする時間」の要素だけではなく、他の様相が加わってキャッチボールの習熟の達成ができるのではないかと考える。

「スポーツ環境」におけるその他の要素の結果は、「達成型」「対人型（チーム型）」ともほぼ同様の結果を示した。

図6は、基礎基本運動の各種目における「できるーできない」が今回取り上げた「運動生活」及び「スポーツ環境」の2つの要因を通して、運動の「好き嫌い」にどのように影響を及ぼしているのかを結果のまとめとして示したものである。

「達成型」の種目において「できる」ようになるために、「運動生活」及び「スポーツ環境」の要因は直接的な影響がなかったことから、「できるーできない」という子ども自身が達成感を味わうことができるかどうか直接「運動の好き嫌い」を決定づける要因であるといえる。また、「対人型（チーム型）」の種目において「できる」ようになるために、「運動生活」及び「スポーツ環境」の要因は重要な役割をもたらすことを示したことから、この「対人型（チーム型）」の種目に対して「できるーできない」が直接「運動の好き嫌い」の関係を定めるのではなく、先行研究で示した家族や友達などの「仲間」と運動やスポーツをすること

に重要な意味をもつことはもとより、子どもの周囲を取り巻く日常生活の中で運動やスポーツと関わるための様々な社会的要因が運動の「好き嫌い」に関与することが示された。

以上の結果から、子どもが「達成型」の種目を確実に習得するためには、基礎基本運動のひとつひとつの動作を理解し、スキルアップを図ることのできる具体的な指導や学習内容の改善が必要であり、「対人型（チーム型）」の種目を確実に習得するためには、スキルアップだけではなく、林（2008）<sup>14)</sup>で明らかにしている「仲間」との交流を中心とする内容、また日常生活においても運動・スポーツに親しむことのできるスポーツ環境の具体的な内容化を図る必要性があると考える。

## IV. 結 論

本研究では、「基礎基本運動の習熟状況」と子どもの「スポーツ特性」の間を結びつける要因及び相互関係を明らかにし、学習プログラムにおける効果的な運動とスポーツ内容及び展開のあり方について検討した。結果は以下のように要約される。

1. 各種目における「基礎基本運動の習熟状況」と好き嫌いなど子どもの「スポーツ特性」の関係が明らかとなった。このことは、現行の学習指導要領の体育科改訂趣旨である「指導内容の明確化・体系化」に沿った授業展開の必要性を強く示すものである。
2. 今日の学習プログラムの展開において、各種目の特性に応じた新たな学習内容の明確化が必要である。例えば、達成型の種目では、達成できるための明確な技能体系に基づく内容が重要であるのに対し、対人型及びチーム型の種目は、社会的要因を明確に位置づけた内容が重要であることを示した。

今後はさらに、子どもスポーツの今日の状況に相応しい現代的な指導のあり方と新しい学習内容の追究をすることが重要になるものと考えられる。

### 参考・引用文献

- 1) 小澤治夫（2008）保健体育教師は「子どもの体力の低下」にどう立ち向かうべきか、体育科教育第56巻11号、p.10-13、大修館書店。
- 2) 加賀谷淳子（2008）ここまで危ない！子どもの体力－提言「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」－、体育科教育第56巻11号、p.14-18、大修館書店。

- 3) 久野 歩 (2006) 学校運動部活動の在り方に関する一考察—マルチスポーツの概念からのアプローチ—, 東京学芸大学大学院修士論文.
- 4) 久保 健 (2008) 体育への期待「体力の向上」にどう迎えるのか—からだと動きの「育ちそびれ」の克服に向けて—, 体育科教育第56巻10号, p.24-27, 大修館書店.
- 5) 佐伯聰夫, 畑 攻, 仲澤眞 (1998) 地域におけるマルチスポーツクラブの研究, 日本スポーツ産業学会平成9年度プロジェクト研究報告書, p.3-33.
- 6) 佐藤良男, 畑 攻, 齊藤隆志 (2004) 指導者のための体育・スポーツ行政, p.14-37, ぎょうせい.
- 7) 産経新聞 (2009) カナヅチ増加・水泳授業二極化・スクールに通わせるか否か, 産経新聞社.
- 8) 畑 攻, 小野里真弓, 齊藤隆志, 他 (2005) 子どもスポーツネットの企画・運用, 日本体育学会第56回予稿集, p.290.
- 9) 畑 攻, 宇土正彦, 八代勉 (1984) 運動・スポーツ行動に対する運動者の主体的条件の類型化に関する研究, 筑波大学体育科学系紀要, p.11-19.
- 10) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005) 都会における子どもの体力・運動能力向上の取り組みとスポーツスタイル, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.291
- 11) 林 園子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2006) 都内小学校と女子体育大の連携とマネジメント, 日本体育学会第57回大会予稿集, p.154.
- 12) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2007) 子どもの基礎基本運動の習熟と生活習慣・運動習慣・意欲に関する研究, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 13) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2008) 子どものスポーツのサービス内容とマネジメント (1) —子どものスポーツスタイルと運動習熟状況からの検討—, 日本体育学会第59回大会予稿集, p.164.
- 14) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2008) 小学生における体力の向上及び運動習慣の形成と基礎基本運動の習熟に関する研究, 日本女子体育大学紀要第39巻, p.35-45.
- 15) 林 園子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2009) 子どもの基礎基本運動の習熟状況とマネジメントの検討, 日本体育学会第60回大会予稿集, p.173.
- 16) 福本恵美子 (2000) マルチスポーツの実際と可能性に関する研究, 1999年度 日本女子体育大学大学院修士論文.
- 17) 細江文利 (2008) 学習指導過程のこれまでとこれから, 体育科教育第56巻13号, p.10-13, 大修館書店.
- 18) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他 (2004) 中学生・高校生の諸特性とマルチスポーツ, 日本体育学会大会第55回大会予稿集, p.377.
- 19) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005) 子どものスポーツスタイルと保護者の期待と可能性, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.290.
- 20) 前田佳奈 (2006) 子どものマルチスポーツと学校・家庭・社会, 2005年度 日本女子体育大学大学院修士論文.
- 21) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓 (2006) 子どもスポーツの学校, 家庭および社会との連携について, 日本体育・スポーツ経営学会第29回大会号, p.37.
- 22) 前田佳奈, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2006) 子どもの体力向上実践事業の取り組みとマネジメント, 日本体育学会第57回大会予稿集, p.154.
- 23) 前田佳奈, 畑 攻, 池田延行, 他 (2007) 小学校における都市型連携システムとマネジメント, 日本女子体育大学紀要第37巻, p.75-87.
- 24) 前田佳奈, 畑 攻, 成瀬美紀, 他 (2007) 子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメント, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 25) 前田佳奈, 畑 攻, 成瀬美紀, 他 (2008) 子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメントの検討, 日本女子体育大学紀要第38巻, p.69-79.
- 26) 正木健雄 (2003) おかしいぞ子どものからだ, p.34-56, 大月書店.
- 27) 三木四郎 (2008) 「習得, 活用, 探究」に応じた学習指導をデッサンする—器械運動の学習指導を例にして—体育科教育第56巻10号, p.32-35, 大修館書店.
- 28) 水上雅子, 畑 攻, 小野里真弓, 他 (2005) 子どもの体力・運動能力向上と都市型連携システム, 日本体育学会第56回大会予稿集, p.291.
- 29) 水上雅子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2007) 親の運動者行動及び運動生活に関する研究, 日本体育学会第58回大会予稿集, p.242.
- 30) 水上雅子, 畑 攻, 前田佳奈, 他 (2008) 子どものスポーツのサービス内容とマネジメント (2) —親の運動者行動及び運動生活が及ぼす子どもの体力への影響—, 日本体育学会第59回大会予稿集, p.165.
- 31) 武藤芳照 (1989) 子どものスポーツ, p.75-87, 財団法人東京大学出版会.
- 32) 文部省 (1995) 小学生のスポーツ活動に関する調査研究報告書.
- 33) 文部科学省 (2000) 小学校学習指導要領解説, p.3-15, 東山書房.
- 34) 文部科学省 (2002) 子どもの体力向上のための総合的な方策について (答申), 中央教育審議会.
- 35) 文部科学省 (2006) スポーツ振興基本計画.
- 36) 文部科学省 (2005) 平成16年度体力・運動能力調査報告書.
- 37) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説, p.1-8, 東山書房.
- 38) 山下秋二, 中西純司, 畑 攻, 他 (2006) 改訂版スポーツ経営学, p.154-156, 大修館書店.

(平成21年9月11日受付)  
(平成21年11月17日受理)